

## テント一週一文 (い)

### —— 南嘉久さんの「私の中の『父と暮せば』」

ある日九電本店前のテントに行った。春陽うららかな日だった。ヒゲの老人がイスに座ったまま腕組みをして居眠りをしていた。私を見ると目を覚まして、「オッ」と言った。私は「村長さんは？」と聞いた。老人はアクビをしながら何か言った。「すぐ帰ってくると思うよ」と言ったように聞こえた。

本当に村長さんはすぐ帰って来た。こんなじいさんにテントの番をさせていて大丈夫ですか、とは本人がいるところでは聞けなかった。村長さんは「被爆二世の人から手紙が来たよ」とプリントアウトした紙を見せてくれた。村長さんにはあちこちから文書が来るので、この手紙もその一つかと思う。村長さんにはテント番の適任、不適任については聞けなかったので、その手紙の発信者について聞いた。

南嘉久（みなみ よしひさ）さんは 1947 年長崎市生まれ。高校までは長崎、大学時代は福岡、生協に就職してからは北九州。文中にあるように両親ともに長崎で被爆して南さんは被爆二世。現在は福岡県原爆被害者団体協議会の事務局長、福岡被爆二世の会会長。

小さいときから原爆のこと、戦争と平和のことを考えていて、「心の感度計」の針に触れた事柄について、ともに生きる人たちへ心からの呼びかけを文章にしている。人間の連帯論の立場からの文章といえる。（連絡先：090-3608-9004）

…… とのことで、テントの村長さんとは経歴も仕事も異なるが、共感するところがあるのだろうと思った。村長さんがプリントアウトした手紙は 1 通ではなかったが、今日はそのうちの 1 通をご覧いただきたい。（以下次号）

（栗山次郎 記）2017 年 5 月 22 日公開

-----  
福岡県教育会館公益文化事業「被爆 70 周年祈念上映会『父と暮せば』」での講演  
(2015 年 2 月 11 日)

### 「私の中の『父と暮せば』」

南 嘉久

#### 1. 「心の被爆者になろう」

被爆 70 周年を祈念する映画「父と暮せば」の上映の前に 30 分間ほど話をさせていただきます。タイトルは「私の中の『父と暮せば』」というものです。

その前に原作者の作家井上ひさしさんについて一言触れたいと思います。一度だけですが私は井上ひさしさんの講演を聴いたことがあります。2000 年のことでした。朝日新聞社と広島市が共催した広島国際会議場での国際シンポジウム「非核の傘を広げよう～核のない 21 世紀をめざして」が開催され、そこで井上ひさしさんが記念講演を行ったのです。その講演のタイトルは「バタフライ効果について」というもので

した。この奇抜なタイトルには思わず「一体どんな話なんだろう？」と関心・興味をそそられますよね。この演題の主旨は「一匹のバタフライの羽ばたきによる空気のわずかな振動でもそれがいつか離れた対岸に嵐を起すことが可能なのだ」というものでした。深遠な理論というより、象徴的な例えなのかもしれません。その講演の中で私にとって今でも忘れることがない話がありました。広島に来る度にいつも身の引き締まる思いがするという井上さんは、被爆者たちの手記を聖書のように読んできたと言うのです。今日の映画『父と暮せば』の父と娘のセリフの中にも被爆者の手記の中の言葉がいくつも出てきます。なぜ井上さんは被爆者の手記や証言を「聖書のように読んできた」のでしょうか。それは、もう一つの太陽が頭上間近に来たようなあの日の地獄図以上の状況の中で人間的な悲惨さとともに、人間の一番すばらしいものがいくつもあったというのです。井上さんはその後も現在に至るまで被爆者を苦しめてきた原爆というものの酷さにふれながら井上さんは聴衆に「心の被爆者になろう」と呼びかけたのです。私は被爆者の手記を聖書のように読み込んできた井上さんだからこそ、「心の被爆者」という思想、そう、それは「思想」といってよいものだと私は思いますが、そこにたどり着いたのだととらえています。

## 2. 私も「心の被爆者」として生きてきた

井上さんのこの「心の被爆者」という言葉を会場で聴きながら私は思っていました。既に小さい時から私は「心の被爆者」として生きようとし、成長してきたのだと。そして私は長崎原爆とともに生きてきたのだと。

私の父、母はともに長崎原爆の被爆者です。戦後生まれの私自身は戦争体験もなければ被爆体験もありません。その私がどうして「心の被爆者」となっていったのでしょうか。

### ①小学校5年生の時の体験

私はみなさんにまず小学校5年生の時の体験を語らなければなりません。

ある夜、父が一冊の写真集を広げながら私たち兄弟、妹に語ったことがありました。それは『原爆の長崎』という写真集でした。長崎に投下された原爆の惨状をリアルに写したその1頁々々の強烈な印象は今でも鮮やかに思い出されます。初めのほうにあった写真は押しつぶされ家屋の下から必死にもがき這い出そうとしたが、原爆の焦熱と炎の中で黒く焼け焦げ頭蓋骨まで露になった死体でした。父は息を呑んでいる私たち兄弟、妹にぼつりと言ったのです。「お前たちの下の姉ちゃんたちがこげんして死んだとぞ。その後上の姉ちゃんも死んだ。そして、やけどで寝ていた寛坊（ひろぼう）が夜中ふと目を開けてね、『おとうさん、今、何時？』と言ってそのまま死んでいったよ」身を硬くして聞いている私たちから視線をはずして宙を見て父はもう一度自分自身に語るかのよう静かにつぶやきました。寛坊のその時の口調を真似たようにして『おとうさん、今、何時？』

おそらく父は寛坊の最期の表情を思い出していたのでしょう。その時小学5年生の私には父の悲しみの深さなど思いやることもできませんでした。ただその時聞いた寛坊の名前と今わの際の彼の言葉は私の胸の中に深く々々刻み込まれたのです。

私の父も母も長崎原爆の被爆者でしたし、私の兄や姉たちが原爆で死んだことを知

って、私は自然に長崎原爆のことを調べ、学ぶようになりました。父はその後原爆について何も語らなかったからです。父は私たち4人兄弟、妹が成長していく姿に、おそらく寛坊たちの幼顔を重ねながらその悲しみを自分の胸の奥底に封印し、新しい家族の幸せのために奮闘していったのでしょう。私の小学校は原爆後特設救護所になった新興善小学校でしたし、中学校は片淵中学校で近くに長崎原爆病院やABCC（原爆傷害調査委員会）がありました。当時国際文化会館に原爆の資料が展示されていたので、そこにはよく通いました。私はどこにどんな被爆資料や展示物があるのかを覚えてしまいました。高校時代には同じ被爆二世が急性白血病で亡くなりました。私は自然と長崎原爆について自分なりに学び、考えながらして大きくなっていきました。

## ②20歳の時に父がたった一度だけ語った「原爆の話」

『原爆の長崎』の写真集以後、父はどこで被爆したのかを含めて私たちに原爆のことを何も語ることがありませんでしたが、実はたった一度だけ私に語ったのです。それは私が20才になった長崎原爆の日の夕方のことでした。長崎の原水禁大会に参加するために帰省した私は夕食後くつろいでいたのですが、父がその私に「今から話したいことがある」とまじめな顔をして言うのです。それはおそらく父が初めて語った自分の被爆体験と子供たちの死の一部始終だったのでしょう。今私は「おそらく」という言葉を使いました。

実は、私は父のその時の話があまりにも凄かったのでしょう、その時に心に余裕がなかった私はしっかりと父が詳しく語ったことをその後全く思い出せなくなってしまったのです。あまりの衝撃度に頭が真っ白になって記憶も消えたのです。父は私が学生時代に長崎原爆病院で亡くなりました。父の話を自分のものにできなかった私は深い罪責の思いを抱いて生きることになります。

## ③ある時ラジオで聞いた話

私は大学を終えて就職し、結婚して子を持つ親となっていました。ちょうどその時にふと聞いたラジオの原爆特集で私は、私にとって決定的に重要になる話を耳にしたのです。それは、「原爆で死んだ人はかわいそうです。でも本当にかわいそうなのは原爆で子供を失った親たちです」というものでした。私は小学校5年生の時に聞いた父の話を思い出しました。私が会うこともなかった原爆で死んだ兄や姉たちのことを思いました。一児の父親となっていた私は、4人の子どもたちを原爆で亡くした父の悲しみの深さを少しは思いやることができるようになっていたのです。

私がある頃書いた「二冊の本の紹介」というタイトルの一文が私のその後の人生の原点となる一文となっていくのですが、その一部を読み上げさせてください。

「もし、ものを見つめる眼、感じる心が深くなっていかなければ、その人生は自分にとってどんな人生だろう。

自分は、自分の魂を、子どもたちを捜し求めて父が歩き回ったあの原子野に連れて行きたい、連れて行かねばならないとその後幾度も衝動に走るように思った。自分の魂も爆風に飛ばされたい。焦熱に焦げつくされたい。降り下りる灰や黒い雨に打たれながら、あるいは炎天の下に、燃え崩れて瓦礫となった家屋の下の数多のむくろを捜し出したい。父や多くの人たちの悲しみ痛む思いをひし抱くために。若かった父と共

に苦しみ悲しみして生きるために。

人にはそれぞれに絶えず自分の生き方を問う原点というべきものがあるろう。私が自分の生き方を問う原点は父の一生だ。自分が人生の辛いこと悲しいことにもくじけないうで明るく生きることがもしもできるとするならば、それは父の一生を思うことができるからだ。父は自分の魂の中に埋めてあるのだ。」

その一文を書いたのは、1981年、私が34歳の時でした。それから私は、井上さんの言葉を借りれば「心の被爆者」を深く自覚して歩き始めることとなったのです。

#### ④父が語った言葉とその奥の思いを取り戻そう

やがて二児の父となった私は、その子たちが成長していく中で父のことを改めて深く思わずにはいられませんでした。そして私が20歳の時に父が語った言葉とその奥の父の思いを私は自分のものとして取り戻そう、父の深い苦しみと悲しみをともに生きよう、と強く決意したのです。私は5巻もある分厚い『長崎原爆戦災史』をはじめ原爆について沢山の手記や本・写真集を読んだり、原爆資料館を何度も訪ねたり、被爆時に父が働いていた長崎機関区（現在 JR 長崎運転所）を訪ねて当時部下だった人たちに話を聞いたり、また手紙を出したり、訪問したりしました。被災地復元図の地図の中に父たちが住んでいた家を見つけ、その跡地にも行きました。調査を通して私は原爆投下後の極限状況の中で被爆者救援列車と鉄道復旧のために精魂尽くして奮闘する父を知りました。疲れ果てた体で熱い原子野を歩き回り、子供たちを必死になって捜し求める父を知りました。そして私はついに NBC 放送局にあったラジオ・ドキュメントの録音の中で被爆者救援列車の話をする父の言葉に出会ったのです。

父は終戦前に病気で先妻を亡くし、当時男手一つで小さな5人の子どもを育てていました。ラジオの中の父の言葉です。「長女の葉子が母親が病気になったもんですから小学生の幼い手で夕ご飯の支度をしてくれたけれども本当に簡単なものです。夕方私が遅く帰ると子供たちが全部私のそばに寄ってお膳を囲むようにして、そして一番すそっ子がカタコトまじりに『おとうちゃん、うちたちやおかゆの水のほうだけいただいておとうちゃんに実のところ残しといたよ』と言っておりました。そうねといって私が頭をさすりながらやったのが本当に思い出されますね」ラジオではその後ほんの一瞬父が沈黙しました。戦時下食料も乏しい中で父たちのささやかな幸福の場面でした。それを原爆は奪いました。爆心地からわずか500米の所にあった竹の久保の木造の鉄道官舎は原爆の爆風と焦熱でひとたまりもなかったでしょう。下の二人の子は黒こげとなっていました。あとの二人は重傷でも生きていてほしい。父は救援列車と鉄道の運行復旧の指揮を必死で進めながら、その後に熱い原子野を探しあげました。長女がなんとか助けられていた長与の救護所に父が駆けつけた時、「お子さんは『おとうちゃんはまだでしょうか』と言いながら30分ほど前に手を胸に当てて息を取られましたよ」と告げられ、最期の対面すらかないませんでした。次男寛之を父はようやく12日に城山の護国神社の防空壕の奥の方で発見します。父が「寛坊！」と呼ぶと静かに力なく振り向いたと言います。ほんによかった、助かったと思った寛之もやけどだけでなく強い放射線を浴びて細胞そのものから破壊されていたのでしょう。終戦の翌日16日に息を引き取りました。その寛坊が夜中ふと目を開けて父にかけた最期の言葉が『おとうさん、今、何時？』だったのです。8月9日に5歳と7歳

の次女、三女が、12日に13歳の長女が、16日に10歳の次男が相次いで原爆のために死んでいったのです。

父はその深い悲しみに封印をして戦後を生き抜いてきましたが、自分も原爆症のために本当に苦しみました。『こんなにつらいものなら線路まで這って行ってその上に身を投げ出したい』とお父さんは言っていたよ」と母が後に語ってくれたのですが、父はその原爆症の苦しみに増す悲痛な思いを抱いて生きたのです。

人は何かに導かれるようにして生きていくことがあるのでしょうか。私は小さい時聞いた寛坊の「おとうさん、今、何時？」の言葉の真実に46年後にようやく出会い、失ってしまった父の言葉を36年後に取り戻しました。

私は悲しみを深く知る「心の被爆者」となりました。

### 3. 『父と暮せば』

さて、井上ひさしさんの原作（戯曲）もこの映画もタイトルは『父と暮せば』となっています。

みなさん、この『父と暮せば』の後にはいったいどんな言葉が続くのでしょうか。いわば『父と暮せば、・・・』となっているのですね。その「・・・」にはどのような言葉が続くのか、そこに井上さんが込めた思いがあるのではないのでしょうか。勿論一人ひとりにその人らしいとらえかたがあってよいことですが。

「あんときの広島では死ぬるんが自然で、生きのこるんが不自然なこと」として「生きとるんが申しわけのうてならん」「人を好いたりしてはいけん」「うちがしあわせになっては申し訳がたたん」と頑なに思い込んでいる主人公の若い娘、福吉美津江が父親との対話の中でどう変わっていくのか。『父と暮せば、・・・』の「・・・」について映画を見ながら、あるいは映画を見終わった後にしみじみ考えてみることはこの映画の味わいを深くするものでしょうし、井上ひさしさんの思いに深くふれることとなるのではないのでしょうか。

映画をこれから見ていただくのですから、映画について私が語るのはここまでとしましょう。

さて、これからは「私の中の『父と暮せば』」というお話となります。二つのことをお話します。

①一つ目。私が被爆者である父といっしょにいたのは25年間でした。私にとって『父と暮せば』の「・・・」は「幸せでした」とか「ありがとうございました」とか、「被爆者として本当に苦しんできましたね」とか、「私を心の被爆者として育ててくださいましたよ」とかの月並みの表現で今日はお許してください。ただ一つこのような場面を紹介させてください。私が通っていた片淵中学校のすぐ近くに当時の長崎原爆病院がありました。体調が悪くなった父はそこに入院しました。父の容態を心配していた私は朝早く学校の屋上に上がりました。すぐ先に原爆病院が見えるのです。すると原爆病院の屋上に誰か人が立ってこちらを見ているのです。向うの人は私を見ると手を上げ、ゆっくり振りしました。父だったのです。私も「お父さん、がんばれよう」と手を大きく何度も振りしました。後で父は「お前が通っている片淵中学校の屋上を見たら誰か生徒が一人屋上に出てきた。見とったらひょこひょこ屋上の端までやって

きた。ひょこひょこした歩き振りでお前とわかったとばい」と語りました。「ひょこひょこ」というのは余計な言い方でしたが、私は朝早く誰もいない屋上で父と心を通わせ、手を振り合ったその時の光景を今でも目の前にいきいきと描くことができます。

②二つ目です。私が被爆者である父のことを思えば、私の心の中で永遠に生き続ける「神話的時間」というべきこの光景に行き着きます。それは私が直接見ることはありませんでしたが、心で見ることができた、父と私が会うこともなかった小さな兄や姉たちとのあの夕食の光景なのです。ここでは、「私の中の『父と暮せば』」というお話しは「私の中の、小さな兄、姉たちの『父と暮せば』」と言い換えたほうがよいでしょう。

夕方遅く機関区の仕事で疲れた父が帰宅します。父の帰りを心待ちにしていた私の小さな兄たち、姉たちが夕食のちゃぶ台の前に座った父をうれしそうにして囲みます。

「お父さん、今日も僕たちみんな良か子で仲良うしとったよ」「今日は暑かったけん、玄武兄ちゃんと僕は浦上川で泳いだとよ」「お父さん、寛坊は泳ぎが上手になったばい」「お父ちゃん、今日のお掃除は啓子がやったとよ」とかその日の報告が早速始まったことでしょう。そして「お父ちゃん、葉子がおかゆ作ったばってんおいしかね。お母ちゃんみたいにはできんけど、どがんやろか」続いて5歳の英子がカタコトまじりに「あのネ、おとうちゃん、うちたちやおかゆの水のほうだけいただいておとうちゃんに実のところ残しといたとよ」と話すような場面だったでしょう。ひもじいくらしの中でささやかだけど父にとっては子供たちとの本当に幸せな光景でした。一番すそっ子の英子が言った時にラジオのドキュメントの中で父は万感を込めてこう語りました。「そうねとって私が頭をさすりながらやったのが本当に思い出されますね」ラジオではその後ほんの一瞬父が沈黙しました。

「心の被爆者」である私は父のその一瞬の沈黙の深さを知っています。

小さな兄たち、姉たちにとって『父と暮せば、・・・』の「・・・」はどういうものだったでしょう。「お母さんが長かこと病気やったけん、お父さんも仕事と看病で大変やったとを僕(おい)たち見とったけん、これからお父さん仕事にがんばってね。僕たち小さかばってんみんな仲良うして、助け合っていくけんね」「お母さんはおらんばってん、僕たちには大切な大好きなお父さんがおるけん、うれしかよ」というような言葉が聞こえてきそうです。父に対する尊敬と愛情と感謝、そして父とともに生きることの喜びと幸福感、兄弟姉妹みんなが仲良く助け合ううれしさに満ちた日々だったことでしょう。

それは私に人間の本当の幸せとはどういうものか、人が人とともにあるとはどういうことかをいつまでもいつまでも教え続けます。そしてそのことによって私が生きることをいつも温かく励ますのです。

ありがとう、私の父よ、会うこともなかった私の小さな兄たち、姉たちよ。

ご清聴ありがとうございました。